

北風にたこは上がる

小川未明

青空文庫

隣となり家やの秀夫ひでおくんのお父さんとうは、お役所やくしよの休み日やすに、外そとへ出でて子供こどもたちといっしょにたこを上げて、愉快ゆかいそうだったので。
 「おじさんのたこ、一番ばんだこになれる？」と、北風きたかぜに吹ふかれながら、あくまで青あおく晴はれわたった空そらを見み上げて、賢二けんじがいいました。

「なれるさ。」と、おじさんは、いったが、そばから秀夫ひでおくんが、「お父さんとう、もっと糸いとを買かってこなければ、だめですよ。」と、いっていました。そのうちに、たこはぐるぐるとまわりはじめました。

「あ、落ちおる！」と、秀夫ひでおくんは、あわててお父さんとうの手てから糸いと

を受け取ると、うまく調子をつけましたので、たこは、やっと落ちなかつたのです。

「おじさんは、まだ下手だなあ。」と、賢二がいいますと、

「あ、はははは。」と、おじさんは、笑いました。

「賢ちゃん、君の家では、活動写真をしているの？」と、お

じさんは、ききました。

「活動写真？ どうしてですか。」と、賢二は、不思議そうに、おじさんの顔を見ました。

「だって、さつきから、ガリ、ガリ、ガリやっているじゃないか。」

おじさんは、それがなんの音であるか見当がつかないので、

賢二けんじくんの兄にいさんか、姉ねえさんかが子供こどもの活動写真かつどうしゃしんでもやっているかと思おもったのでした。

「あ、あれか。」と、賢二けんじは思おもいましたが、

「なんでもないんですよ。」と、賢二けんじは答こたえました。

「そうか、ちようど、活動写真かつどうしゃしんをまわしているようにきこえるから。」と、おじさんは、いいました。

かつて、秀夫ひでおくんの家いえにも、活動写真機かつどうしゃしんきがあつて、みんながいつて、よく見みたのですが、あまりひどくハンドルをまわしすぎて、ついにいまでは、その機械きかいは、役やくにたたなくなつてしまつたのです。おじさんは、たぶん、自分じぶんの家うちにあつた、その機械きかいのこを思おもい出だしたのでしよう。

「お姉さんねえが、なにかお料理りょうりを造つくっているのです。」と、賢二けんじは、答こたえました。

このごろ、てんぴを新あたしく買かったので、お姉さんねえは、しきりにいろいろのお料理りょうりを造つくるのだけれど、あまりうまいかなかったのです。そんなことを思おもうと賢二けんじは、ちよつと苦笑くしやうせずにはいられませんでした。

おじさんは、また、どんな料理りょうりかと思おもったのでしよう。合点がてんがいかにぬというような顔かおつきをして、
「ふうーん。」といって、そのまま空そらを仰あおいで、秀夫ひでおくんの上あげているたこを見みていましたが、そのうち、お家うちへ入はいってしまいました。

「秀夫くん、あとで、遊びにおいでよ。かるたとりするからね。」
 といつて、賢二も、お家の中へ入ってゆきました。

台所へくると、てんぴの焦げる臭いがしました。強いガスの火にかかっているからでした。そして、女中のきよが、いっしょうけんめいに鉄ざらの中へ卵を入れてかきまわしていました。ガリ、ガリ、ガリという音が、ほんとうに活動写真機をまわすときの音のようでした。

「お姉さん、また、カステラをこしらえるのかい？」と、賢二がききますと、女中のそばに立って、じつとさらの中を見つめていましたお姉さんは、賢二をにらむような目つきをして、

「いいから、あっちへいっていらつしやい。」といつて、弟を、

あちらへ追いやろうとしました。なぜなら、昨日もカステラを造り損ねて、賢二くんに笑われたからです。

「昨日のように、卵を焦がしてしまつては、食べられやしないよ。」と、賢二が、いいますと、お姉さんは、女中をしかりつけて、

「きよは、力がないのね。もつとかきまわさなければ、だめなのよ。私に、おかしなさい。」と、あわだて器をひつたくつて、お姉さんは、ガリ、ガリ、ガリと、すさまじい音をたて、卵をさらなかの中でかまわしはじめました。

「お隣のおじさんが、活動写真をやっていのかときいたよ。僕、きまりがわるかった。」と、賢二が、いいますと、さすがに、

お姉さんもおかしくなつてきて、ついに笑い出してしまいました。
 そこへ、お母さんが、出ていらして、
 「なにを、そんなに、大騒ぎをしているんですか？」とおつし
 やいました。

「三時のおやつに、カステラをこしらえるつもりなのが、できない
 のよ。」と、お姉さんは、顔を赤くしました。

「いつも、そう、卵ばかりむだにしては、困りますね。」
 こう、お母さんが、おつしやられると、お姉さんは、

「学校で、ならつたとおりにやったのよ。どうして、家ですら
 と、うまく卵がふくらまないんでしょう。」と、さも不思議そう
 にいいました。

賢二けんじは、そこにあつた、卵たまごのからを数かずえて、

「お母かあさん、六つ卵たまごをむだにしましたよ。もつたいないですね。毎日まいにち、ねずみのご馳走ちそうばかりお姉ねえさんは造つくっているのだ。僕ぼくに、それだけのお金かねをくれれば、大おおだこが、買かえるのだがなあ。」といいました。

これを、おききなさつたお母かあさんは、

「おまえも、このあいだから、いくつたこをこわしましたか？」
といつて、賢二けんじくんをおにらみになりました。

このとき、お姉ねえさんは、

「きよは、なんにも知しらないのね。」といいましたので、お母かあさんは、

「それは、あたりまえですよ。あんたは、学校へ行って、なら
つてきたお料理さえ満足にできないではありませんか。」と
いって、おしかりになりました。お姉さんは、だまつてしまいま
した。

二、三日前には、賢二くんが、自分のたこを買うのに自分で
いかず、女中のきよを使いをやったばかりに、具合のいいた
こが手に入らなくて、上げると、すぐにぐるぐるとまわつて、木
の枝にかけてしまったのでした。そのとき、彼は、家へ帰つて、
「あんな、わるいたこを買つてくる、ばかがあるものか。」と、
きよに小言をいっただけでした。すると、きよう、お姉さんが、し
かられたように、お母さんから、

「なんで、きよが、たこの善悪なんか知るものですか。自分で買いにいくべきものを、横着をするから、そんなことになつたのです。もう、あんたには、たこを買つてあげません。」といつて、しかられました。それで、今日まで、たこを持たずにいるので、外へ出ても、ただ秀夫くんらの上げているたこを、ぼんやりとながめていたのです。

姉弟は、自分たちのおへやへ入ると、まず、お姉さんが、「お母さんは、きよの味方ばかりしていらつしやるんだわ。」と、不平をいいました。

賢二は、心の中で、お母さんのおつしやることは、正しいと思つたけれど、

「きよは、とんまなんだよ。」といつて、具合の悪いところを買ってきたので、腹立たしそうにこういいました。

「そうよ、ものはこわすし、あまり、りこうではないわ。」と、二人は、いっしょになって、きよの悪口をいっていました。

* * * * *

ある日のことです。賢二が、ふとお勝手から外を見ると、物の置の蔭のところ、きよがあちらを向いて、手紙を読みながら、ときどき目をふいていました。

「泣いているのだな。また、田舎の親から、お金を送れと、いつてきたのかしらん。」と、賢二は、思うと、かわいそうになりました。

きよの田舎は、遠い、東北のさびしい村でありました。家が貧乏なのに、不作がつづいて、ますます一家は、苦しい生活を送っているのです、きよは、毎月もらうお給金のうちから、幾何かを送って、親を助けているのですが、それでも足りないのみえて、よく無理と思われるような手紙をよこすのです。

「おまえも、かわいそうだね。」と、お母さんは、きよに同情していらつしやつたのでした。賢二は、また、そんなことであらう、ここで自分が見ているには悪いと思つたので、気づかれなようにして、奥へ入つてしまいました。

それから、しばらく、きよは、そこに立つて考え込んでいるよすでしたが、そのうち、内へ入つて、お母さんのところへきて、

手紙をお見せしようと思いました。お母さんは、きよのようすをぐらんになると、すぐに、

「なにかまた、心配になることをいつてきたの？」と、やさしく、お問いなさいました。

「はい、お父さんが、病気がどうです……。」

「お父さんが、病気？」と、お母さんは、びつくりして、その手紙を受け取ってごらんになりました。それには、一週間ばかり、お暇をいただいて、帰ってきてくれるようにと書いてありました。

「これは、弟さんが、書いたのかい。」と、お母さんは、子供らしい文字の手紙を見ながら、おっしやいました。

「はい。」と、きよは、答こたえました。

きよにも、弟おとうとがあつて、小しょうがっこう学校へいつているそうです。かたわらでこれを聞きいていた賢けんじ二は、父ちちおや親が病びょうき気では、どんなにさびしかろうと、田いなか舎に姉あねの帰かえるのを待まっている少しょうねん年の身みの上うえに同どうじよう情じようせずにはいられませんでした。そして、その手紙てがみの文字もじは、うまいほうではなかつたが、いかにも丁ていねい寧つつしに謹つつしんで書かいてあつたので、きよの弟おとうとさんは、まじめな少しょうねん年ねんであろうと思おもつたのでした。自じぶん分の読よんでしまつた雑ざつし誌しでも、きよが帰かえるときに、弟おとうとさんへ持もつていつてもらおうかな、などと考かんがえていました。

きよは、その日ひの夜行やこうで立たつことになりました。常つねなら、はじ

めて田舎へ帰るので楽しかろうものを、打ち沈んでいる顔つきを
見ると、かわいそうでなりませんでした。お姉さんと、賢二は、
停車場まで、見送つていきました。

「お父さんが、たいしたことがなかつたら、早く帰つておいで。」
と、お姉さんは、きよをなぐさめていらつしやいました。賢二は、
また、心の中で、きよに、わがままをいって悪かつたと後悔し
ていました。きよは、そんなことをなんとも思つていないようす
で、汽車が動き出すと、さも名残惜しそうに、幾度となく頭を下
げて、遠ざかつてゆきました。

翌朝のこと、お姉さんは、いつもより早く起きて、お母さん
のおてつだいをいたしました。

「なかなか感かん心しんだ。」といつて、お父とうさんは、おほめになりま
した。

「これが、幾いく日にちもつづけば、ほんとうに、えろうございますが
。」と、お母かあさんは、笑わらつておつしやいました。しかし、お膳ぜんを
出だすときに、はや、お姉ねえさんは、茶ちやわんを一つ割わりました。

「大だい事じな茶ちやわんを割わりましたね。」と、お母かあさんが、おつしやる
と、

「冷つめたくて、手てがすべったのですもの、しかたがないわ。」と、
お姉ねえさんは、かえつて、ぷりぷりしていました。

「そそつかしいからですよ。」

「学がっこう校こうのことが、気きになるんですもの。」

「もし、きよが、こわしたら、なんといいいますか？」

こう、お母^{かあ}さんがおつしやると、お姉^{ねえ}さんも、自分^{じぶん}がして、はじめてわかったので、ちよつとしたことできよをしかつたことを、ほんとにわるかつたと思^{おも}いました。外^{そと}には、北風^{きたかぜ}が吹^ふいています。賢^{けんじ}二は、明日^{あす}の日曜^{にちよう}には、新^{あた}しく買^かってもらつた、大^{おお}きなたこを上げ^あるのを楽^{たの}しみにしているのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「北風《きたかぜ》にたこは上《あ》がる」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北風にたこは上がる

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>